

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

還らざる人を送りし花の駅

間 浩太

(評) 單に花と云えば桜の花のことを云うが、この句「花の駅」は満開の桜のある駅のことを指しているであろうが「還らざる人」とはどんな立場にある人のことであろうか。現今の若者に説明しても多くは通じないであろうが、六十年前の昔を回顧すれば「同期の桜」という現実につき当る昭和二十年三月某日、春陽光うららかな日「美しく立派に散るぞ」そう言つて一番機に向かう戦友の胸に俺はまだ蓄だつた桜の一枝を飾つて送つた「明日は俺の番だ」死ぬ時が別々になつてしまつたが、靖国神社で逢える、その時はキット桜の花も満開だろう。この花の駅の一語は風土に対する限らない愛憎の中にあるほのかな哀怨のながみが滲み、説明のし難い諦観のひびきをもっている。

うたね
転寝にドラマ途切れし春炬燵

刈谷 志津

(評) テレビの連ドラを見ていたのであるう。漸く寒さから解放されて暮らしよう。季節になつて、ついつい眠つてしまふ。春という季節は、寒過ぎることもなく、暑くもない。春炬燵はそんな季節の推移する中で利用される。テレビのドラマを鑑賞しているうちに眠つてしまつて話のすじ書きが途切れたのである。説明を加えなくても内容のよく解る句である。

轉りに敗けぬ少女の笑い声

津田 久美

(評) 春らしく明るい少女の声、この少女の自在さは青春そのもの。短言葉の中にも新鮮な活力を生み、少女の笑ふ開けびろげた障子の向こうに春の轉りがあるが、少女の笑い声は、その轉りに拘泥していない。少女らしく精一ぱいに、青春を謳歌している。

加茂山に木々と競演鯉幟

森岡 照月

(評) いの町の街の北部内野にそびえて加茂山があるが山の上に風をはらんで、高々と靡く鯉のぼりや、武将の幟が立ち並んでいるのが見かけられる。まことに見事で、さわやかである。

藤棚の奥より声の筒抜ける 片岡 包女

山里に生きて残りし花菜種 竹崎 光子

膝ついて露の葉に受く岩清水 川村 博子

春愁や夫婦茶碗の伏せてあり 大川 節弥

花に酔ふ鳥になりたし詠ひたし 植田 紀子

朝霞東の間隠す函館山 井上 郁子

一人身ひとりが多忙花の冷え 友草 水月

味見して領いて出す木の芽あえ 中野 好子

入学の子の列に入るもん白蝶 岡本とも子

春だもの元氣元氣とウォーキング 間 信子

咲き満ちて花は古刹を大きくす 伊藤 たみ

喪の色のする桜の花に出会う 秋田 律子

桜人肩をたたかれ歳さかれ 弘瀬うき子

山笑う手をたづさえて棚田みち 筒井 一平

溪流へ耳軟てて春を聴く 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」

締め切り 毎月第2月曜

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

犬や猫は正しく飼いましょう

誰にも愛されるペットでも、しつけや飼い主の方のマナーが悪いばかりに、近所迷惑や地域社会においてトラブルの原因になりかねません。飼い主の方はルールとマナーを守り、責任と愛情をもって最後まで飼いましょう。

○散歩中のフンは直ちに片づけ必ず持ち帰りましょう。

- 犬の放し飼いはやめましょう。
- 犬に無駄吠えをさせないようにしましょう。
- 猫はできるだけ室内で飼いましょう。
- 野良猫などにはエサを与えないようにしましょう。
- ペットは絶対に捨ててはいけません。
- 無理な多頭飼育はやめましょう。
- 正しく「しつけ」をしましょう。

▶ 問い合わせ 環境課

☎ 893-1160